美術月評

〈8月〉

稲嶺成祚

人間臭さとれ自然に近づく

永津禎三展

一気に洋風へ…活力に満つ

能山宗忠彫刻展

永津禎三展 二〇号のキャンバス四枚をセットにした絵二点を含む個展。観客の一人が「森林浴している気分」といったが、いい得て妙だと思った。暗いブルーを基調として視野に余るこれら大作は、ひんやりした肌合いをもってそそり立つ白い岩壁の下を歩くようにも錯覚させた。

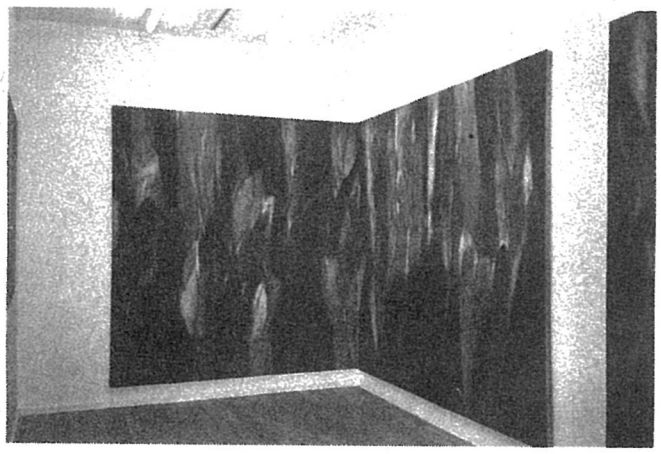
永津の仕事は、作品の大小にかかわらず四枚程度のパネルによって成り立っている。大作の場合は、それは運搬や制作の便宜のためとも思われるが、彼の場合はそれだけではない。それぞれの一枚はそれだけで独立するよう工夫されているし、それぞれのパネルは隣のパネルと必ずしも連続した形や色をもってはいないのである。主題となる形や色をもたないので、横へいくらでも増殖していけるし、それでいてまとまった空間を示すのである。

永津の前の仕事には、意地悪な目にも似た不協和で鮮やかな色が、ちらちら覗いていたが、今回の作品にはそれがなくなっている。それだけ人間臭さがなくなって、自然に近付き、スケールが大きくなった。しかし、自然に近付いた分、パンチが弱くなったようにも思う。

能山宗忠彫刻展 彼はここしばらく、禅画のような童の絵を描いていた。この現代離れした絵に、彼の巧みさには感心しながら、一つの個性の終えんを見るようで、私は気になっていた。

今回の能山の仕事は一気に洋風になって、活力に満ち、前を向いて翔んでいる。「かつての能山が帰ってきた」会場に入ったときの感慨である。

彼の仕事は、いずれも孤独でひょうひょうとした子供の世界だが、抵抗の強い金属を自由に駆使する確かな技術と造形性に支えられて、ひ弱なセンチさから救われている。沖縄の、どちらかというと、量のみにとらわれている彫刻界で、空間と文学性を多分に取り入れながら、それでいてくずれない彼の仕事は貴重だと思う。

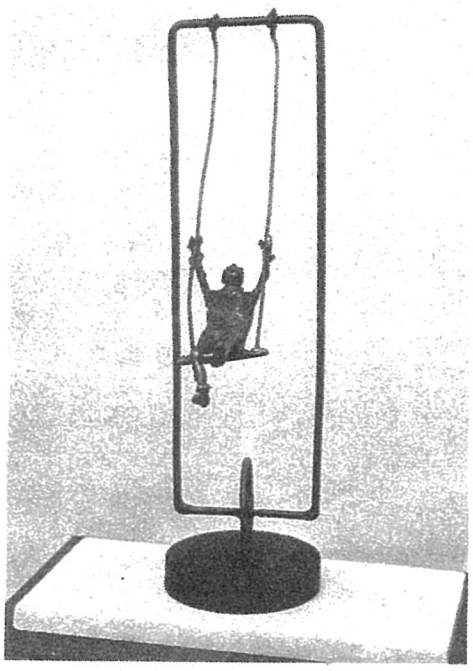


UTAKI—Karimata—3・永津禎三

古き沖縄への憧れ

仲松清隆絵画展 円形を中央においた曼陀羅的な構成で、青い空間に浮かぶ、ぬめぬめしたアメーバー状の物体は、エロチックな示唆にとむ形をしている。この仲松のプラスティック的ともいえるモダンで輝きのある色面がなぜ「古格」なのか、よく理解できなかったのだが、彼の説明によると、仏像とも神事を司どるノロともとれる形が、いずれの画面にも埋め込まれ、彼の古き沖縄への憧れがひそかに語られているのである。

最近作の「古格—雨乞い」のシリーズでは、円形の構成から脱して天に祈る三人の人物様の形で構成されている。沖縄には数少ない、ものを描く抽象画家として、今後の展開を期待したい。



「ブランコ」能山宗忠

興味深い様々な試み

宮城孝也絵画展 一九八三年から今年までの「雑草シリーズ」の大作が並んだが、この草原をテーマにしての、宮城のさまざまな試みがみられて、興味深かった。

一九八三年の№2、3は、落ち着いたトーンの中で稲妻状に走る白い光による遠近感が美しく、一九八四年の№8、9では、それは横縞の構成となり、雑草をテーマにしながらどれだけ雑草から離れ得るかを試している。

№16、17では再び稲妻状の線が走るが、より重厚さを増し、№20では黄や緑から白やこげ茶に変わり、枯草のイメージとなっている。№25では中央を横断し、白く発光するような横縞をおいて、雑草よりも抽象的な空間へと近付く。一九八六年の№4では、黒い線が強く斜めに走り、これも雑草からは遠のく姿勢に見える。

ひとつのテーマをどれだけ多様に展開できるかは、作者の力量をはかる一つの目安になると思う。最近作には、宮城の苦悩をみる思いがするが、登りつめた岩壁の彼方の新しい世界を期待したい。

「雑草シリーズ」・宮城孝也

重厚と詩情がマッチ

四人展 普天間敏の「石敢当」「民話」「魔よけ」「花」などは、重厚さと詩情とがうまくマッチした佳品だった。暗いバックの中で色が映えて美しかったし、白い縁取りの線がなくなったのも、作品を落ち着いたものにしている。

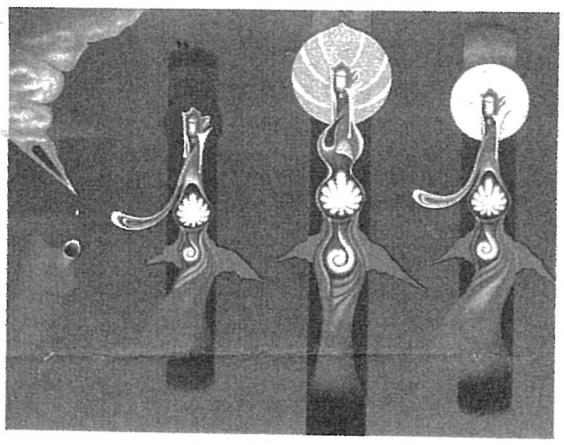
宮城篤正はパースペクティブな空間を下敷きにして、遠近を強化するか拒否するか、形をものに見せるかものを打ち消すか、の選択操作で画面を形作っているようである。また、それは直線とぼかしの対立的技法の操作でもある。これら二つの要素のほどよい調和をねらっているとみた。

奥原崇典は「花たち」で多様な技法を展開してみせている。線描による精密な描写、ぼかしを利かした荒々しい表現など自在な筆さばきである。

奥原崇仁の仕事は、精緻さで勝負する。厳格な「技巧の人」としての気迫に満ちたものだった。

感じられた手堅さ

葉月会展 清澄な色使いが共通する具象画のなかで国吉典子ら四人の立体派的な作品が並んだのが目新しかった。



「雨乞い」・仲松清隆

小那覇幸子、屋嘉文子、仲里依子、仲里ひろみ、山之端三枝子、源河幸子、内原千津子、小橋喜久子、宇根広子らの仕事に手堅さを感じたし、長田紀昭の生真面目な自画像にはユーモアがただよっていてよかった。

他に、重厚さの中にユーモラスな形態が浮かぶ「民話を語る」の喜友名朝紀展、屋良朝春のキラキラ輝く風景、裏町から眺望へと主題を移した比嘉良博、暗く重厚な山田武、女性らしい華やかさと叙情を示す照屋洋子らの白亜美術十一人展、彫刻家でありながら明色調の空間をみせた西村貞雄展などがあった。

（琉大教授）

美術アート